

國學院大學學術情報リポジトリ

見えないものを可視化する工夫：
段注のいくつかのモジから

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大橋, 由美 メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000215

見えないものを可視化する工夫

—一段注のいくつかのモジから—

大橋 由美

はじめに

1音節が1単語（コトバ）である中国のモジ（所謂漢字）は、この世のすべてを記す手段として1文字（ひとつのカタチ）で創造された。現存する最古の字書である許慎『説文解字』（100年成る。説文と略す）には9,353字みえる。

この世のすべてが目に見えるものではない以上、見えないものも可視化つまりモジ化する努力は容易ではなく、必要と考えられたすべてのモジが実現を見るまでには長い伝説の時代のような年月もまた必要であったろう。民を思うゆえの多大な努力の根本には、如何に効率よく巧みに他（ある意味を表すカタチを持つ1つのコトバ）と紛れることないその1モジ（カタチ）だとわかるように造る創造上の工夫は欠かせなかったはずだ。量産でき、単純で応用力のある造字法か否かという要求も常にあったろう。一旦その巧み且つ単純な造字法を考え出し量産が可能となれば、その規則性には容易に従い易く、大いにモジ世界が広がり、表記上豊かな世界が出現したと想像できる。モジの造字法が応用が利けば、他の法を取って新たに考え出すことなく長きに亘りその法によってモジは造り続けられたろう。この困難な課題を克服した説文の六書説とは、簡体字をも創り出し今日まで生きる優れたモジの造字と応用に関する総合的な考え方であったと考えられる。¹

一般に人の心は目には見えない。そのココロを表すコトバを声（音声言語）ではなくモジ（表記言語）化するさらなる困難さも容易に想像できる。コトバにならない様々な感情や語気を表し、修飾的な使い方をするコトバなど、より伝達する意図を審かにするためのモジ化は言を俟たないであろう。

説文の𣎵(𣎵)はこのような所謂「語之助」すなわち語助(助詞・虚字)をいう。同字下で段氏は凡例であるとして説文(説解)に𣎵とある語助の例のみ挙げて注し自説を述べるが²、当然著述の基本姿勢から、この引用例以外にも段注に散見する。本小稿では、段注の3字を中心に、語助のように見えないモノをモジ化することにつき段説の一端を見たい。

本小稿における凡例は、大略以下の通り(段注は經韻樓原刊本、上海古籍出版社)。

- ・六上12a：六篇の上、12葉オモテ
- ・柰：親字(見出し)の楷書
- ・画像𣎵：同小篆
- ・2字下げ㊦㊦：段注の説解で、段注の句読による番号を付け訳出
- ・3字下げ㊦㊦…：各説解下の段氏の注を訳出
- ・1・2などと案…：筆者による補注番号と考察

なお、段注本文と筆者の補注は、注として本文末に一括する。

I 柰と胡、そして奚

この3モジを見てみよう。柰(カラナシ、果物の唐梨)と胡(大きなアゴの肉)は暮らしの中で目にし易いモノであるといえ、奚(大きな腹)もみえるモノではある。

I-1. 六上12a柰(𣎵)(木部)³

㊦柰果也(柰という木の果実である)。㊦木にしたが从い(木を構成成分としてもち)、示がそのセイ聲(発音)。

㊦假借して柰何(の場合の柰)字とす爲る。⁴『尙書』(召誥)・『左傳』(宣公12年)に見える⁵。俗に柰に作るのは非である。

㊦奴帶切(ダイと発音)。15部。

案 木部に属するので本義(説文が説く字義)は樹木に関するが、古典類からこの本義の用例を引いて証拠立てず、直ちにこの字の用法である假借を説く。假借として用いられるのが一般で、より重要と考えた注釈者の態度の表れであろう。

柰何は、一般には字義の誤解を防ぐため2音節（2字）で使用されるその場合の意味で使うその1字（柰）であることをいうので、何が代表して担う語義である。

目に見える果実の意味は形声により造った字で表すが、それを假借（同音）の用法によって、2次的に目に見えない何（助詞）として主に用いてきたことがわかる。

I-2. 4下31b胡（𠂔）（肉部）⁶

㊦牛𠂔𠂔也（牛のアゴの肉が垂れさがる（そのもの）。㊦肉に从い古がその聲

㊦玄應（『一切経音義』）、司馬貞（『史記索隱』『封禪書』）は（説文を）引いて皆に（うしのアゴを）牛領（9上4a）に作る。按えるに此では𠂔（9上4a）と言い（それで）以て頸（9上4a クビ）を包含するのである。𠂔は、「頤也（あご・匠）」である。⁷牛は𠂔（^キよ^{ケイ}）頸に至り（肉が）下向きに垂れ肥えた動物である。

これを引伸して凡そ（下垂した）物は皆て胡という。（『詩経』豳風狼跋）「老狼有胡」、（鵝4上49b）「鵝胡」、（『漢書』『郊祀志上』顔師古注）「龍垂胡𠂔」の如うなのが是れである。⁸

胡と侯は音が轉じて取も近い。故に『周禮』（大行人）「立當前侯（侯は疾に作るのを段氏が改めた）（立つと前のたれさがったところに当たると）」では（鄭玄は）注して「車輶前胡下垂柱地者（車の輶の前に垂れ下がり地に立って他が頼りとする柱）」という。⁹

經傳では胡・侯（5下23a乎溝切。4部）・遐（説文にない）は皆て何（8下13a胡歌切17、・疑問の意）と訓む。¹⁰（『儀禮』）「士冠禮」「永受胡福」で（注して）鄭（玄）は「胡猶遐也」といい、（『詩経』周頌・載芟）毛傳では「胡、壽也」、（『逸周書』）「諡法（諡法解）」では「彌年壽考曰胡」、「保民者艾曰胡」とあり、皆て壽命遐遠（命がながいこと）を謂う（意味である）。¹¹

㊦戸孤切（コと発音）。五部。

案 肉部にあり、牛の体表の目立つ特徴をもつ肉について説く。この意味を表すモジは、形声によって造られた字である。

中国人にとって亀甲獣骨文字や生贄としても長くかわりよく知る牛の部位や特徴を表すモジは重要であったろうから、細かい分類は早くから必要としたかもしれない。垂れさがった肉の部分は果たしてより正しくはどこの部位なのか。クビあたりではあるにせよ、説文を引いた古い書物には複数のアゴを意味するモジがある。クビあたりのならばどの字でもよいというのではなく、段氏はそのなかで原則通りに説解を正しいとして「牛は（肉が）頤自り頸に至り下向きに垂れ肥えたモノ（動物）である」と広範囲にアゴを意味する広義の𩚑を支持する。

これから下方向に垂れ下がるモノ（様子）はすべて胡^コという、と凡例となることを説く。この発想は自然で発展的な広がり因ると思える。「垂れ下がる」義は、その様子は目にしやすく概念的に理解しやすいようでも、具体的な専用のモジを造ることは至らなかったからかもしれない。

胡ではなく侯と書かれる例（『論語』・郷党では誤らず侯は疾に作る）へと続くのは、音韻説から何に結び付けて、助詞類（疑問・反語など）となることをいわねばならないからだろう。上で垂れ下がるのみを凡例としては字書の注釈としては十分でないだけでなく、助詞としてこそ一般的用法と思われるからで、わざわざ胡ではなく侯と書かれる『論語』・郷党を引いてまで助詞の用法を説くことが、注釈者の態度としてこの段注では重要だったと考えられるのではないか。

目に見える牛の垂れ下がった頸のあたりのたっぷりとした大きめの肉の意味を形声により造った字で表し得たのち、次に假借（同音）の用法によって、目に見えない助詞としても用いた。

最後に、意味・用法がさらに広がり発展し、「命がながい」意になることを注する。「下へ肥え垂れる」意が「未来へ発展するように続く」、と人の自然な発想が引き伸ばされてのことであろう。

I-3. 10下18b奚（奚）¹²

㊦大きな腹である。㊦^{ケイ}奚に从い^{ケイ}奚の省略形がその聲。㊦^{ケイ}奚は籀文の系（字）

㊦豕部の（9下36a）^{ケイ}奚字下（説解）で「豚生三月、腹^{ケイ}奚^{ケイ}兒（豚は生まれて三ヶ月となれば、その腹は^{ケイ}奚（いかにも大きい）さまだ）」という¹³。

古くは奚^{ケイ}と穢^{ケイ}は通用した。『周禮』「(夏官) 職方氏 穢養」で杜子春は穢を讀んで奚と爲る¹⁴。許(慎)は艸部(1下41a藪)では「奚養」に作る¹⁵。

㊦胡雞切(ケイと発音)。十六部。

㊦十二篇系部下に見える(系部に所属する字)。

案 大(宀)部にあり「おおきい」に関するコトバだが¹⁶、「腹」がといいつつ、何の腹か具体的でなくわからない。加えて、この奚自体は説解を証拠立てる用例を経書類には見いだせない。「何の」を求め説文所収字で確認すれば、奚を形声字の声符にもつ穢がある。意符は豕部でも説解では穢が重言で、やや適切さには欠けるように思えよう。そこでまず奚と通用すると前置きし、第一の証拠として『周禮』の例を挙げ段注を締めくくる。

『周禮』同条に注した杜子春が「穢を讀んで奚と爲る」と意味をとるために読み替え同時に理解した(替えた語は音注と釋義を兼ねる)のは、假借字であることを意味する。奚を段氏は假借により説いた例を根拠にしたことになる。奚はあまり「大きな腹」として常用される語ではないのではなく、假借字として用いられる場合が多いと段氏は考えて、通用すると注したと思われる。

実は奚自体が説文藪字下に見え、幽州にある大澤「奚養」(『輜軒使者絶代語釋別國方言』を引く)とするので意味上は少なくとも「おおきい」とはいえる。しかし、大(宀)部にある字としての説解「大きな腹」とは関係がないことを藪(1下41a)で段氏自身が注している。¹⁷つまり、奚として重要な字義は「おおきい」で、假借によって奚が「おおきい」を本質とすることが分かりやすくなったとはいえるであろう。オオキイは見えるようではあるが、実質がわかりにくい点で見えにくいモノなのかもしれない。

II 3例と何について

Iの各段注から、出来上がって既にある見えるモノを表すモジを活用し、見えないモノを表すモジとして使うことにしたと考えられる。全て假借の法による。段氏が何故言及しないか考える意味は別途あるだろうが、実は奚には助詞の用法があり(『經傳典釋釈詞』他)、『通訓定聲』によれば何

に通じる。つまり3字は假借すると助詞「何」に用いられる。3字の假借について、段説から詳しくみてみよう。

II-1 段氏の假借説と助詞説——基本として——

段氏は、叙の六書説で假借とは所謂当て字と説き、「凡そすべて事物（抽象及び具象であるモノ）でその意を表す字（A）が無いことについては、皆なすべて（その意を）寄託する対象（字B）があつてからそうしてモジがあるということが可能となる（凡事物之無字者皆得有所寄而有字）」と注する。寄託できる条件は、（モジは無くともコトバとしての意を表わす発音はある）Aの発音が意味する意味と、本来異なる字義を持つ既製のBとが発音上同じか或いは類似する条件をもつことである。

次に段説の助詞説をこれまでの研究を踏まえ概観する。

段氏が注をする場合の基本的態度は、人の心の自然の広がりにより意を払うように思われる。広がった字義を全て挙げるのではなく、基本義のなかにおのずからその発展するような意味を内包しているということ、読む者に理解させる注釈の仕方が多いと見える。筆者はこの態度は独特であると理解している。奚の段注の最後でも、あるコトバのイメージが伸び広がり、結果として人が抱くさらなるイメージを意味する語義が増したことをいうように思う。自然に広がる心象に起因する語義を、独立した別義のように解し辞典の字義としては独立させるように、どこまで異なる語義として扱うかは、意見が分かれるところだろう。筆者は、必ずしもイメージが広がらない（人の発想として不自然）と思うものについては別義とし、ある語の異なる字義とみなすべきと段氏は総じて考えていると読み取ってきた。従って、段氏の見えないモノである助詞類をどう段注内で説くかには制限があり、同時期の王引之『經傳釋詞』などとは異なる採り方であることは、これまで述べてきたとおりである。このことは¹⁷本稿の奚で、他書では何との関連を説くに対し、段氏は積極的に他2例字のように説かない（言及しない）ことから察せられよう。

II-2 段注の何

本論文の例3字が假借によって収束する終点の何を検討することにする。

8上13a何（何）（人部）¹⁸

見えないものを可視化する工夫

㊦儻（かつぐ）である。㊧あるいは誰であるという。㊨人に从い^カがその聲。

㊦何は俗に荷^カに作る。猶ど佗（担う）の俗に駝（説文なし）と作るようであり、儻の俗に擔^{タン}と作るようである（以上すべてニナウ意）。¹⁹

『詩経』「商頌」で（玄鳥）「百祿是何（百くの祿をこそ何われよ）」、（長發 三章）「何天之休（天の休を何われた）」、（長發 四章）「何天之龍（天の龍を何われた）」とあり、毛傳は（玄鳥）「何、任也（何は任うだ）」といい、（鄭玄）箋（玄鳥）は「謂擔負（擔負うを謂う（意味である）」という。『周易』（大畜26 上九）「何天之衢（天の衢^{大道}を何う）」で（唐の李鼎祚『集解』が引く後漢末三国時代呉の）虞翻は（大畜）「何、當也」といい、（噬嗑21 上九）「何校滅耳（校を何い耳^{なく}を滅す）」で（陸徳明『經典釋文』が引く三国魏の）王肅は（「噬 嗑」『釋文』引）「何、荷擔也」と云う（以上全て原義ニナウ・カツグ）。

さらに又『詩（經）』（国風・曹風・候人）「何戈與祲（戈と祲とを何げる）」（小雅鴻鴈之什 無羊）「何蓑何笠（蓑を何げ笠を何げる）」は傳では皆に「掲也」と云う。掲とは「舉也（にないあげる）」である。「戈祲手舉之（戈と祲は手でもって掲げる）」、「蓑笠身舉之（蓑と笠は身でもって掲げる）」は皆に擔義の引伸である²⁰（以上アゲル意）。凡て經典が荷^カに作ることは、皆て後人が竄改した所である。²¹

㊦誰・何・孰三字は皆て問^{スイ}（問う意を表す場合の^{ことば}問=助詞）である。²²

㊦今音では擔何（という場合）は則り胡可切（カと発音、上声）で、餘義（それ以外の意味の場合）では胡歌切（カと発音、平声）だ。古音では平と上は甚しくは分けなかった。十七部。²³

按えるに今義では何とは、辭^{コトバ}であり、問う（意の疑問詞）である。今義が行われて古義が廢れてしまった。さらに亦た借りて呵と爲る。²⁴

案 3字が助詞として集約する何とは、形声字で、人部にあり人の動作「儻」^{カツグ}を表すために造られた。

段注は、何字は次に同義の儻が説文では配されている（互いに所謂同部転注の関係）から、カツグ意では、何と儻とが正しい字と説く。そのために、同類の意（ニナウ）で字体に正一俗の対立がある例として正：佗一俗：駝（説文なし）、儻一擔^{タン タン}を用いる。佗は人に関し、駝はこの動作が動物によりなされることに焦点が移り（よって説文にはない後発の字と解せる）、儻（何に同じく人の動作）一擔（手の動作に特化）を挙げる。

次に字体に差異はあるが、何の字義は経書類では古くから『詩』・『易』（の注釈書には）に見え、當（ひきうけて任う）・荷擔の荷（擔の意の意）・掲と、全て「カツグ・ニナウ」意であることを述べる。

以上から、説文の字義を証拠立てたうえで、「問𠄎」（用法）とする。これは、『詩経』（長發）の疏（孔穎達『正義』）にすでに「辭」と説かれているものであり、段注は勿論それを知って立論の根拠として採ったはずであろう。本何字下の注としては、何が問う場合の𠄎となったとのみ述べ、他の同義の誰・孰^{スイ シュク}は合わせて言及する。必要最小限で最大の注と考えるべきかもしれない。誰と孰も、それぞれ造字時の本義を残しつつ、別義として用いられることが今義では多い点が、共通と考えているのであろう。ゆえに、両義併存の場合、発音によって区別される（所謂破音がある）ことば（辭）であるといい、最後に寧ろ字義の流行り廃りとして、述べおくに止めているのであろう。假借（別義の字に同音）して違う意味をもつようになったのではなく、モジの使い分けによる言葉の用法の違いであるから、𠄎というより辭であろう。何と3例字とは假借の関係で意味が「何」（疑問の助詞）となるが、その何はカツグではないとなる。

II-3 3例字と何との古音説上の関係

以上の假借説を踏まえ、段氏古音説から3字と何とは次のようである。

何：段氏17部。

- ・擔何（カツグという場合）：胡可切（カと発音、上声）
- ・餘義（それ以外の意味の場合）：胡歌切（カと発音、平声）

と段注にあるが、助詞の用法は餘義なので胡歌切（平声）を採ると、匣母歌韻 平聲 何小韻 胡歌切 一等 開口である。

1. 奈 (奴帶切 15) : 泥母 泰韻 去聲 奈小韻 奴帶切 一等 開口を採る
(段説では古くは去声はなかったが)。
 2. 胡 (戸孤切 5) : 匣母 模韻 平聲 胡小韻 戸吳切 一等 合口
 3. 奚 (胡雞切 16) : 匣母 齊韻 平聲 奚小韻 胡雞切 四等 開口
- 参考) 𪛗は匣母 齊韻 平聲 奚小韻 胡雞切 四等 開口で、奚と同じ。

これから、

- i. 奈 (奴帶切・15) 一何 (胡歌切・17) では、15部と17部とでは合音となり、更にとともに声母も匣母 (喉音濁) である。
- ii. 胡 (戸孤切・5) 一何 (胡歌切・17) では、5部と17部とでは合音となり、更に声母も匣母 (喉音濁) である。
- iii. 奚 (胡雞切 16) 一何 (胡歌切・17) では、16部と17部は隣り合い合音で、やはり更に声母も匣母 (喉音濁) である。

以上から、明らかにかなり近い音であり通じるので、假借の条件は十分である。同音或いは近似の音という条件が同義で用いられることには欠かせないのである。

この前提を踏まえ、「皆て問𪛗 (問う意を表す場合の𪛗)」という誰・何・孰の三字では「假借して何となる (何として用いる)」と言わないことを、何と同義で用いられる誰および孰の段注から考えてみる。²²

誰：原義は疑問専用。

孰：原義 (別字孰を造り表す) にはこのモジでは使わず、疑問専用で使う

何：原義 (荷^{はず}を使う) では使わず、疑問専用、且つ誰・孰と熟し2音節となり疑問をあらわす辭をつくる。

辭 (連結したコトバ) の場合の組み合わせは、単純には、誰孰・何孰・誰何・孰何・何誰・孰誰の6種が考えられる。各用例の可能性や意味用法は段注の引用証拠の例から考える。

A：誰孰と何孰はない。

B：誰何・孰何・何誰・孰誰

- a. 何を含まない孰誰はあるが、『戦国策』(楚策)「秦王身問之、子孰誰也」で注は「猶何人 (何人^{どんなひと}のようだ)」で、何に替えてもよく誰はヒトの意で「何人」に同じようだとあるので、孰に实际的な意味はほとんどなく、誰は特にヒトの意 (疑問でも) で用いるように思われる。

何←孰

- ・誰：人に特化。
- b. 何を含む…何のみは即問（つまり問う）のみ。
 - ・誰何・孰何：詰問のニュアンスだが、個別では以下。
 - 誰何：借問。
 - 孰何：詰問以外に柰何（反語）に同じ場合もある。
 - 柰は反語（疑問の形で強調して否定）。
 - ・何誰・誰何
 - 何誰：何単独に同じ、あるいは誰単独に同じ。 何←誰（ヒト）
 - 誰何：過秦論では反語か。

『漢書』「衛綰傳」顔師古注が引く 李奇注「孰、誰也。何、呵也。」は「何即問也。不誰何者、猶言不借問耳」。

よって、何単独ならばただ問う意であるのに、何が後に付く2音節（誰何と孰何）の場合は、詰問のニュアンスがあるようであることがわかる。終いの音で問う意が残るからなのだろうか、わからない。

その次には、同じ組み合わせで疑問の形をとり反対の意を強調する反語のニュアンスもある場合がある。ヒトやモノ、あるいは場所や数量ではなく、方法「ドノヨウニ（スル）」の否定である例が見える。

以上より、本論では引いた用字例が多いとは言えないが、何は『爾雅』「釋詁第一」の劈頭「初、哉、首、基、肇、祖、元、胎、俶、落、權、輿、始也」のように、通語的であることは明確とまずいえよう。²⁵孰は何に替えてよく、誰は何に替えてよいが人の意に特に用いるようだ。反語は何の前に孰か誰を用い2音節とし、柰何もある。

Ⅲ おわりに

見えないモノをモジとするには如何なる工夫をしてきたか、というという視点から論じた本稿で取り上げた例は、既に多くの助詞があることを知る以上、真にわずかにすぎないことは承知している。しかし、訓詁学の立場から援く証拠を如何に訓んだかをも考慮すれば、垣間見えた説は、段氏独得の助詞説の一角を成すであろう。假借説や本義の捉え方として段氏の基本的説に大きな自己矛盾や破綻がなく大筋が通る点で、説を補強するものといえ、主たる3例には、段氏に特徴的な助詞説の一端はやはりみえた

と考える。

叙の許慎六書説について大きく二元化した自説を基本原則としてあてはめて確信の度を深める、あるいは例外をあぶりだして補強する、これが段注一書を貫く段氏の説論の基本方針であろう。おのずから現れ出た例外にはそうなる理由がある。段氏の古音説と、段注一書編集の基本方針は、加えて同学の諸氏たちとの切磋琢磨によって、それは長い年月をかけて両輪のように続けられてきた研究の精華であることは言うまでもない。

段注は畢生の大著である。一旦ある結論に達したと思っても、常に更新し続けられ成った精華である。段注執筆60余年の間には、学者仲間との関係により一般的な学説の進化、変化があったはずである。独得の自説も修正を求められたであろう。常に戦うように修正を続け、本稿はそのある時期の反映であるかもしれない。しかし、そのなかには、揺るがない視点やその後新たな発展を遂げたり、あるいは修正を余儀なくされるに至る兆しを読みとることができるかもしれない。助詞説を考える上でヒントとなるいくつかの点は、ひき続き用例を集めて考究したい。

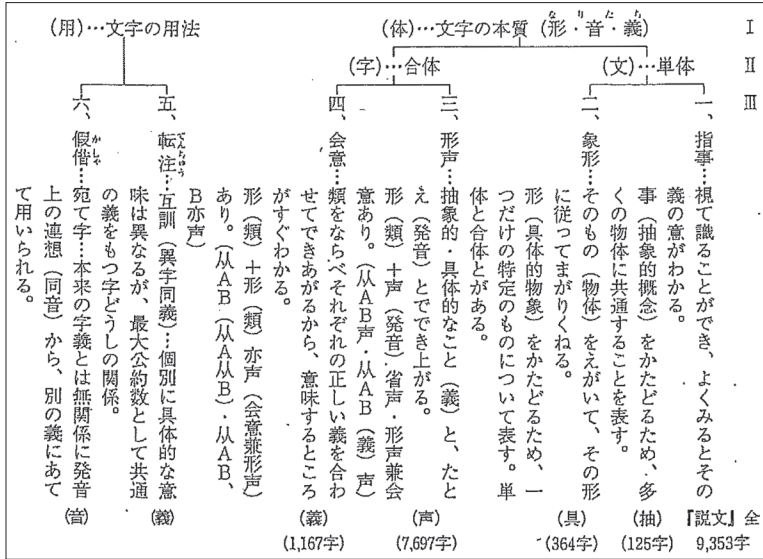
注

- 1：許慎『説文解字』叙とその段氏の説とを筆者が整理した「六書の図」（大橋「文字字階梯（一）」全国漢字漢文教育学会『新しい漢字漢文教育』2005、第40号）として示す。本小稿は段氏六書説に従い述べるが、結果として段氏説の如何が自然と表出するものとする。

筆者が「事物」を「抽象及び具象であるモノ」と解したのは、指事の「事」は抽象的なモノと段氏は叙で注し、「物」は分けられ他と区別されるさまざまな個別のモノと説解（2上牛部）で説かれることに拠る。すなわち抽象・具象を問わずすべての「モノ」は六書説では「象形」によって造字される、と叙十五篇で説く。この指事と（狭義）象形を併せて象形（広義）とし、これが文（1次的な単体のモジ）を造る方法である。これを踏まえた次の段階で、複数の文を合体する会意と形声の方法によって字（2次的で合体のモジ）を爆発的に増加させた、と段氏は説く。文の造字法では説文全体の1割にも満たないが、2段階目の字の造字法のうち特に形声により8割に相当するモジを造りだしたとされる（『説文通訓定聲』）。

これから、段氏はこの世のすべてをモジ化するのは、文の象形（広義）が先ずあってこそであると考えていることがわかる。字は文を重ねることによって始めて可能になるのであるから、モジ要素の基本は文の応用度、つまり発展の仕方にある。発展可能な文（単体のモジ）を如何に多く造るにかかっていたと考えられよう。

六書の図



2: 説文の詞(訓)(9上29b)「意内而言外也。从司从言(司に从い言に从う)」を段氏は見出し親字から𠄎(𠄎)と改め「从司言(司と言(言を司る)に从う)」として「司者、主也。意主於内而言發於外。故从司言(司とは主である。意が内で主となりそうして言が外で發せられる。故に「从司言(言を司るを構成成分として持つ)」と注する。「内なるココロを表出する一段注の「𠄎」を中心に一」(『國學院雑誌』第117巻11号、2016.1)(同題による口頭発表あり)参照。

3: 「㊦奈果也。㊦从木示聲。」(「」内が説解、以外が段注。以下同じ)

㊦假借爲奈何字。見尙書左傳。俗作奈。非。㊦奴帶切。十五部。

説文には「果也。从木示聲」とあり親字である奈が説解にないので段注は補う。説文には削るべき字が残ったもの(複舉篆文)がある場合も多いが、本説解のようになればただの「果物」となり意味が通じないからである。和訓にはカラナシと残る。

4: 奈は、本義を表す樹木の音(奴帶切、段氏古音説で15部)と、奈何(疑問イカン・イカニ・反語イカンゾ)の意の時の発音とが段氏音韻説(六書音韻表)から音韻上の条件(同音或いは近似音)を満たしたことによって、假借を可能にしたことをいう。奈は奴帶切で、泥母 泰韻 去聲 奈小韻(小韻代表字)。

5：-1 『尚書（偽古文尚書）』「五子之歌（国を失い帝徳をもなくした兄帝太康を心配し弟五人が歌った歌）」

其一日「皇祖有訓、民可近、不可下、民惟邦本、本固邦寧。予視天下愚夫愚婦一能勝予、一人三失、怨豈在明、不見是圖。予臨兆民、懷乎若朽索之馭六馬、為人上者、柰何不敬？（其の一に曰う「皇祖おしえに訓がある。民は近づけるべきで、（見下して）下においてはいけない。民は惟だ邦の本であり、その本が固ければ邦は寧らかだからだ。予は天下に愚かな夫と婦つまであれその一組が予より勝ることができることを視る。一人（予）が三たびし失そびれば、その怨みは豈して在りかが明らかになろうか、まさしく領國であることを見ないのである。予は兆くの民を臨めするに、朽ちた索たづなで六頭だての馬を馭つつしみおそれる。人の上におる者と為して、柰どう何してこのように邦の根本である人民を敬わないであろうか？」、と）」

-2 『左傳』（宣公12年）

「河魚腹疾柰何（河魚は腹やまいが疾におかされれば、どうしようか。（腹から腐る河魚は、ここが侵されればどうしようもなくなる））」（段氏説を多く引く阮元校勘記には「柰何淳熙本、岳本柰作柰。按柰正字○今訂正」とある）。

以上引用した2経書から段氏が柰を説くにふさわしい用例として採る為政者（内部）から腐敗して国が亡びることを例えていう二例はともに假借「柰何」の例である。柰一字ではなく何と連なる柰何で反語の意である。なお、論旨に関係ないが『古文尚書撰異』も著した段氏は為政者（国が危うい）の用例を引くことは屢々である。ここも偶然であろうか？ 興味を抱く。

6：「○牛頤頤也。○从肉古聲。」

○玄應、司馬貞引皆作牛頤。按此言頤以包頸也。頤、頤也。牛自頤至頸下垂肥者也。引伸之凡物皆曰胡。如老狼有胡、鶉胡、龍垂胡頤是也。胡與侯音轉取近。故周禮立當前侯注曰。車軛前胡下垂柱地者。經傳胡侯遐皆訓何。士冠禮。永受胡福。鄭曰。胡猶遐也。毛傳。胡、壽也。謚法。彌年壽考曰胡。保民耆艾曰胡。皆謂壽命遐遠。○戸孤切。五部。

7：-1 ・元應『一切経音義』が引く説文説は3か所、「垂胡」は卷27a「説文牛頤垂下也」と卷12a「説文胡謂牛頤垂下者也」で、卷二十三12bは「胡等」で「説文胡牛頤垂下者也」とあり、以下に「亮吉日説文作牛頤垂也」とあり、少しずつ全て異なる。

司馬貞『史記索隱』『封禪書』「…百姓仰望黃帝既上天、乃抱其弓與胡籃牛故後世因名其処曰鼎湖、其弓曰烏。…」で『索隱』は「説文曰「胡、牛垂頤也。」、釋名云「胡、

在咽下垂」者、即所謂嚙胡也」とある。段氏が「皆に領に作る」とするのに合わないが、後述8：4「領」では「今とはいえば則り領の訓は頤と爲す。古と今で字が同じではないのである。」と注して更に時代的な違があり、合わない。

-2 9上4a領(頤)「○項^{くびすじ}である。○覓^{レイ}に从い令^レがその聲。」

○按えるに項は當然頸に作るべきである。(『詩経』衛風)「碩人」、(小雅 桑扈之什)「桑扈」の傳で「領、頸也。」といい、此れが許(慎)が本づいた所だからである。『釋名』(釋衣服)、『國語』(楚語上「緬然引領南望」)の(買達)注(緬^{とおくきもうよう}然に領を引き南のほうを望みやる)も同じで、領字は(この字で)以て頸を全まる言うのであり、(これで)以て頭後を釋すということには當らない(妥当ではない)。

(しかし)『廣雅』(釋親)「領、頸、項也。」は分別るほうが宜いものを合せて渾言する若^ようなもので、其の全書の例類が皆て然うなのである。衣の曲った衿^{えり}(まるえり?)は領と謂い、亦た同じように衣の後を謂うのではない。…(以下略)

-3 9上4a頤(頤)「○(頤)頤(あご)である。○覓^{カン}に从い啗^{カン}がその聲。」

○(12上19b)臣の下(説解)に「頤也」という。臣とは古文の頤で、此と轉注と爲す。(『漢書』王莽傳(莽為人侈口蹙頤)では頤に作り、正字である。『方言』(輜軒使者絶代語釋別國方言、十)では頤(胡感切。7部)に作るが、説文においては假借字(ともに段氏7部で同部假借)と爲る。○胡男切(カンと発音)。七部。頤は同じ。

-4 9上7a頤(頤)「○面^{かお}が黄色い。○覓^{カン}に从い含^{カン}がその聲。」

○(『楚辞』)「離騷」苟余情其信娒以練要兮、長頤頤亦何傷(かりそめにも、わたしの思いがまことに表面上美しく立派で内容がよく練られていることによって要を得ているのならば、たとえ長らく飢えに苦しんだとしても、また同様に何を傷もうか)で王逸は「頤頤、不飽兒(頤頤は^{十分に}飽ない兒)」と注する。本(覓)部の頤字の下(説解)で「飯不飽面黄起行也(飯が飽でない^{たべもの}と面が黄色くなりはじめると云うので、(頤の字)義が充足しあうことが得る。今はといえれば則り領の訓は頤と爲す。古と今で字が同じではないのである。

○胡感切(カンと発音、匣母)。七部。(『文選』)李善注の「離騷」では音は呼感反(カン、曉母)。

-5 頤臣はの新附字ゆえ段注にはないので、12上19b臣(臣)を見る。

「○頤^{あご}である。○象形。○凡て臣の屬は皆な臣に从う」

○(9上4a) 頁部に「頤、頤也」というので、二篆は轉注と爲る。臣とは、古文の頤である。鄭玄は『易』（『周易集解』「頤（山雷頤、食うために正しい努力をする）卦辭」）で注して「頤は中る。口の車輪の名である。下で震動すれば、上で止まる。口の車（アゴ）が動いてそして上るので、因って咀嚼を輔けてそれで以て人を養う。故にこれを頤という。頤は養である」という。

- 6 9上4a頤（𩚑）「○頭莖（頭部でまっすぐな部分）である。頁に从い莖がその聲」
○居郢切（ケイ）。11部。

8：-1 『詩経』幽風 狼跋「老狼有胡」

「狼跋其胡載蹇其尾（年老いた狼は（前に進めば前足が）其の胡を跋み、（後ろに下がれば後ろ足が）載ち其の尾に蹇く）」（鄭玄）注は「興也。跋蹇、蹇踳也。老狼有胡（六義の興である。跋は蹇（フム）、蹇は踳（ツマヅク）である。老いた狼には胡（アゴの垂れ下がった肉）がある）」とある。

- 2 4上49b鵠（鵠）「○鵠胡（ベリカン）は、○汚澤（水鳥）である。○鳥に从い夷が聲」

○(文章が) 返る。「汚澤也」は（『爾雅』）「釋鳥」「鵠、鵠鵠」で（『詩経』）毛傳は「鵠、汚澤鳥也（鵠は汚澤にいる水鳥である）」とある。按えるに、今『爾雅』は俗字が多いので、『毛詩』が「汚澤」に作るのが、正しい。（『禮記』）鄭（玄）注は「表記」で「鵠、鵠胡」と云う。

○汚澤は善に泥水の中に居る。許（慎）と鄭（玄）は皆に鵠胡と云う。『爾雅』と毛詩が胡と言わないことについては、此の鳥は本もとは単独（単音節）で鵠と呼んでいて、其の胡が水を抒むことが能きことをば以て（理由として）、その故にさらに又鵠胡と名づけたからなのである。

『國語』（呉語）は「盛以鴟夷而投之於江（盛るのに鴟夷をば以ってし、而して江に投げる）」だが、惟だ宋の明道二年本のみ鴟鵠に作り、（『國語』の韋昭）注は「鴟鵠、革囊（鴟鵠は革囊）」と云う。按えるに（『爾雅』）陸（璣）疏は「鵠胡、頷下胡大如數升囊、若小澤中有魚、便羣共抒水、滿其胡而棄之、令水竭盡、（魚在陸地、）乃共食之、故曰洵河（頷下の胡は大きく數斗が入る囊のようで、小澤中に魚がいるような場合、その便に羣れなし水と共にこれを抒み、其の胡が滿ちれば水を棄て、水を竭盡にさせて、（魚は陸地に在るようにさせ、）そこでやっと乃り共に魚を食べるので、故に洵河（河の水を洵いで善いものとそうでないものを選びわける・ベリカンの別名）」という。

然うであれば則り此この革囊は鵠と名づけ、亦た同時に容れ受けることが

できる意を取った。應劭は『漢書』（陳遵傳）に注して「取馬革爲鴟夷。鴟夷楹形。而楊雄酒箴曰。鴟夷滑稽。腹如大壺。盡日盛酒。人復借酤（馬の革を取り鴟夷を爲る。鴟夷は楹（酒器）の形。それで楊雄は「酒箴（酒についてのいましめ）」で「鴟夷は滑稽で、腹は大きな壺で、盡日酒を盛るには、人は復くりかえした酤ひとよぎを借りるようだ」といい、（顔）師古は「鴟夷、韋囊。以盛酒。卽今鴟夷勝也（鴟夷は韋囊で、それで以て酒を盛る。卽り今の鴟夷勝である）」という。然うであれば則り凡そ夷に作るものについては皆て鶉の省略で、鴟夷と云うものについては、其の鶉が貪ることと、鶉が善く受けるようなことを謂う（意味する）のである。古音のごときは鶉は夷（段氏以脂切、十五部）に同じく讀む。

㊦杜兮切（テイと発音）。十五部。

-3 『漢書』「郊祀志上」顔師古注「龍垂胡頰」

「鼎既成、有龍垂胡頰下迎黃帝（鼎は既に完成し、龍は胡頰を垂らしその下で黃帝を迎える）」

師古は「胡謂頸下垂肉也。頰、其毛也、音人占反。（胡は頸下の垂れた肉を謂う。頰は其の毛であり、音は人占反（ゼンと発音する）」という。

9：-1 胡は戸孤切・五部（匣母 模韻 平聲 胡小韻 戸吳切 一等 合口）、侯は乎溝切・四部（匣母 侯韻 平聲 鉤小韻 古侯切 一等 開口）で、声母は同じで隣り合う韻だから、段説では最も近いといえる。

-2 疏は「立當前疾」は俗に誤ったもので、古くは「立當前侯」に作るという。段氏の『周禮漢讀考』が説文を引き車制を説き「蓋故書作侯」というのを疏がひく。

10：遐は説文になく新附字であるので、段注にもない。ただ、遐の声符段が3下20aに「借也」とあり、段注では「古雅切（コと発音）。古音は5部にある」となる。

11：-1 『儀禮』「士冠禮」「敬爾威儀淑慎爾德、眉壽萬年、永受胡福」で鄭（玄）注は「胡猶遐也（胡は猶うど遐のようである）」。

-2 壽は段氏古音説では3部（殖西切は禪母、有韻だが上聲で去声ではない）で、胡（5部、戸孤切で匣母、模韻平聲）とは合音ではある（所謂声訓とはい難いか）。

「有椒其馨、胡考之寧」で傳は「椒猶飴也。胡、壽也。考、成也」という

-3 『史記』（卷32・齊太公世家第二）「而立其弟靜、是為胡公（而うして其の弟靜を立て、是しく胡公と為た）」の張守節『史記正義』では、（逸周書）「諡法解」を引き「彌年壽考曰胡、久也。保民耆艾曰胡、六十日耆、七十日艾（彌年で壽考は胡といい、久しいである。民を保じ耆艾は胡といい、六十歳は耆といい、七十歳は艾

という)」という。

12：「㊦大腹也。㊧从大𧣾省聲。㊨𧣾籀文系」

㊦豕部𧣾下曰。豚生三月、腹𧣾𧣾兒。古𧣾𧣾通用。周禮職方氏𧣾養。杜子春讀𧣾爲𧣾。許艸部作𧣾養。㊧胡雞切。十六部。㊨見十二篇系下。

13：9下36a𧣾（𧣾）「㊦生れて三月の豚。㊧腹は𧣾𧣾とした（いかにも大きい）兒である。

㊨豕に从い𧣾がその聲」。

㊦此ここで當然^{くぎ}句るべきだ。下（続く説解）には當然「一曰（あるいはいう）」の二字があり別けて一義と爲るべきである。

㊨「𧣾𧣾」は各本（大徐本と小徐本）では「𧣾𧣾」に作るが、今正す。大部（9下36a𧣾）で「𧣾、大腹也」といい、疊韻（ともに齊韻だが更に且つ匣母）をば以って訓と爲す（声訓。𧣾（大きな腹、16部）で𧣾（生まれて三月の豚、16部）の意を説く）。

（楊雄）『方言（輜軒使者絶代語釋別國方言 八）』に「猪…其子或謂之𧣾（猪は…其の子は或いは𧣾と謂う）」という。㊨胡雞切（ケイと発音）。十六部。

なお、『方言』同条の錢繹『方言箋疏』ではこの最後に段氏説を引き𧣾と𧣾が並に通じる」と述べる。また、いうまでもなく『方言』は段氏がよく引く『風俗通』（著者応劭）や『漢書』との関係もあり、戴震『方言疏証』及び盧文弨による校正がある。『爾雅』同様段氏にとっては相互に見るべき重要な書であったはずであるから、度々見える（引く）説は、得意自信の説であったであろう。

14：『周禮』（夏官司馬）「職方氏 𧣾養」の「東北曰幽州、其山鎮曰醫無閭、其澤藪曰𧣾養（東北は幽州といい、其の山鎮は醫無閭といい、其の澤藪（草木が生い茂るおおきな沢）は𧣾養という）」の校勘記では「杜子春讀𧣾爲𧣾、杜子春讀𧣾爲𧣾、漢讀考云説文作𧣾養、從杜易字也」とある。

天下九州の地図を掌り四方の貢物をあつかう官であるから、この𧣾養とは幽州で豕が丸々と太りその腹が大きいように飼ひ養うことをいうのであろう。段氏は説文が杜子春が「𧣾養」と文字を読み替えて改めたことに従ったと考えるのは段氏古音説では同音となるためであろう。班固『漢書』「地理志卷八」顔師古注は「在長廣」。

15：（1下41a藪）「𧣾養」

説解は「㊦大澤也。㊧从艸𧣾聲。㊨九州之藪㊩楊州具區、㊪荊州雲夢、㊫豫州甫田、㊬青州孟諸、㊭沅州大野、㊮隴州弦圃、㊯幽州（河北省）𧣾養、㊰冀州楊紆、㊱并州昭餘祁是也（蘇后切）」とあり、㊯下段氏注に、

「幽州𧣾養。周禮作𧣾養。杜子春讀𧣾爲𧣾。按説文大部𧣾、大腹也。豕部𧣾、

朧生三月、腹奚奚兒也。杜蓋說此藪名取大腹意。不取豕意。故易^マ糶爲奚。而班、許從之。鄭曰。糶養在長廣。漢長廣縣屬琅邪郡（「幽州奚養」は『周禮』では「糶養」に作り、（校勘記で）「杜子春讀糶爲奚（杜子春は糶を讀んで奚と爲た）」とある。按えるに説文大部の奚字条では「大腹也」、豕部の糶字条では「朧生三月、腹奚奚兒也（奚奚は段注による）」だ。杜は蓋ん此この藪名を説くのに大腹の意を取り、（部首の）豕の意を取らないので、故に糶を易えて奚と爲たのだろう。^{しか}而し班（固、『漢書』地理志卷八。その「藪曰糶養」の顔師古注は「在長廣」）と許（慎）はこれ（杜説）に従い、鄭は（『周禮』で）「糶養は長廣に在る」という。前漢では長廣縣は琅邪郡（徐州、これは疏に同じ）に屬した。）とある。ただ、段注最後の段「而班、許從之。鄭曰。糶養在長廣。」は、（杜子春説を引く）鄭（玄、『周禮』職方氏）は「糶養」とし、（注は）「在長廣」としている。徐州は山東省南東部から江蘇省の長江以北である。

16：大部はともに十部下で10下4b大（大）、10下17b亦部の大（亦）の順に配列される。一般の大（大）とは異なる亦（甲骨文に見えないようだ）部に奚は属す。

亦（亦）「㊦籀文で、古文を改めた。㊦亦た（古文と）同じように人の形に象る。

㊦凡そ亦屬は皆な亦に从う。」

㊦古文が大に作るの、籀文とはいへば乃りは（それを）改めて亦に作ることを謂う（意味だ）。本もととはいへば一字だった。而し凡そ字が偏旁が或いは古（文）に従い、或いは籀（文）に従って一ではなかつたので、許（慎）は字書（説文）を爲るにあたっては乃り析けて二部と爲ざるを得なかつたのだ。猶ど人と儿が本とは一字だったが、必ず析けて二部と爲さねばならなかつたようなことである。顧野王は『玉篇』ではというと乃り隸法（隸書の書き方）を用いて二部を合して一部と爲た。（よってそのまま）遂に古（文）籀（文）の分を攷えることができなくさせてしまったのである。

㊦亦とは、また古文同様に、である。大は人の形に象り、此も亦た人の形に象るので、其字は同じで、則り其音は同じである。而し大徐は徒蓋切（大、タイ）、他達切（亦、タツ）と云うが、分別て殊とさらに誤る。古くは去声と入声は分けなかつた。凡そ今の去聲の字は、古くは皆て入聲だった。大は入聲に讀むことについては、今は惟だ會稽大末縣が有るだけで、獨り古語を存する耳のみだ。（しかし）實は則り凡そ大は皆な入（声）として可く、古文が大（声）で、籀文が大（声）という謂ではない。

17：以下のこれまでの関連する論考を参照されたい。

2012.2 「すなわち」考（『國學院大學紀要』50）・2016.1 段注と「アミ」を表す
 モジについて一率・畢を中心として—（同『紀要』54）・2019.1 字義の広がりについて—「歟」字の段注からみる—（同『紀要』57）

18：「○儻也。○一日誰也。○从人可聲」

○何俗作荷。猶佗之俗作駝、儻之俗作擔也。商頌。百祿是何。何天之休。何天之龍。傳曰。何、任也。箋云。謂擔負。周易。何天之衢。虞翻曰。何、當也。何校滅耳。王肅云。何、荷擔也。又詩。何戈與祲。何蓑何笠。傳皆云。揭也。揭者、舉也。戈祲手舉之。蓑笠身舉之。皆擔義之引伸也。凡經典作荷者皆後人所竄改。○誰何孰三字皆問語。○今音擔何則胡可切。餘義胡歌切。古音平上不甚分也。十七部。按今義何者、辭也。問也。今義行而古義廢矣。亦借爲呵。

19：十三經注疏本『周易』では何は、「大畜（抑止された剛直な者が最後に自由になる）」の注が「辭」、疏が「語辭」と解し、「噬嗑（物を噛み砕く・断罪の仕方）」では注と疏は言わず（つまり辭）校勘記に「石經、岳本、閩監毛本同じ。古本は何は荷に作る…」とあるので、説文本義と解する。唐代の注中に引かれる虞翻（今文学・惠棟の研究がある）と王肅を引いた「商頌」で玄鳥と長發は連続して収まり、説解の「ニナウ（カツグ）」意の例。

・玄鳥：「殷受命咸宜、百祿是何」 鄭玄箋「何、任也」

・長發：「受小球大球、為下國綴旒、何天之休」、「受小共大共、為下國駿龐、何天之龍」
 なお、當が任の意である例は、『国語』『晉語』韋昭（三国の）注にもあり、全て後漢ごろ「何、任也」とする訓詁の例を挙げている。

本稿の趣旨ではないが、敢えていえば、段氏が立論の根拠として挙げる例はやはり興味深い。本条を例とすれば、直ちに一般的と思える引伸義の辭の意に解する根拠ではなく、本義と説くものを選び取るのは、独得の見識による説と思う。本義自体がどう豊かな広がり内蔵するのかと理解するかにより、安易に別義とし別けて立てないことが可能となる。豊かな本義として理解する姿勢が、假借や轉注の用法を見出させ、段氏の古音説を発揮させ、あるいは限界も教えるように思う。

20：『詩經』は注19原義の引伸「挙げる（手を手段とするが原義だが、手段が変わってもアゲルであるので、引伸という）」意の例。

・「曹風」候人：「彼候人兮、何戈與祲」、傳「何、揭、祲、戈也」

・「小雅 鴻鴈之什」無羊：「何蓑何笠、或負其餼」、傳「何揭也」

21：1下27a荷（荷）「○扶渠（ハス）の葉。○艸に从い何がその聲。」

○…高（誘）は注して『淮南（鴻烈解）』で「荷夫渠也。其莖曰茄。其本曰蓐。」

其根曰藕。其華曰夫容。其秀曰菡萏。其實蓮。蓮之藏者蒨。蒨之中心曰薏（荷は夫渠である。其の莖（真直ぐなクキ）は茄といい、其の本は薏といい、其の根は藕といい、其の華は夫容といい、其の秀（つぼみが開こうとするハナ）は菡萏といい、其の實は蓮。蓮の内蔵するものは蒨で、蒨の中心は薏という）」という。大かたの致としては『爾雅』と同じで、同じく亦た「其葉蕝」の三字が無い。蓋ん大きな葉が人を駭かすので、それ故にこれを荷と謂うのだろう。大きな葉が扶搖して（勢いよく）起り、渠（みぞ）の央は寛大なので、故に夫渠という。『爾雅』は葉を假りて其の通體を名づけたので、故れて莖華實根を分別で各おの名づけて冠するのに荷夫渠の三字をば以ってしたのだから、則り必ずしも更えて其の葉を言わないのである。荷夫渠の華は菡萏と爲し、菡萏の葉は荷夫渠と爲すのは、省文互見の法（文章を省いて互いに参照する）である。或いは葉を闕くのでこれを補い、同時に亦た必ず當然其は葉は荷と言うべきで、重複を嫌わず、蕝字を造ろうと臆うことは無庸（もちいない）であったかしらんとおもう。…。㊦胡哥切（カと発音）。十七部。

段注ではニナウ（去声）については「古無去声」説より言及しない。原義の植物についてのみいうので、ニナウとするのは俗の一語で済ませたか。ただ、その発音カが「人を驚かすほど大きな葉」であることをいうのは、後述の呵（しかる・わらう）と声との関連を想像させよう。胡哥切ならば 匣母 歌韻 平聲。

22 : -1 3上30a誰（誰）

㊦誰何（その名前を尋ねることば）である。㊦言に从い^ス誰がその聲。」

㊦三字でひとつの句と爲る。各本^{テクスト}（大小徐本）が誰字を少くのは、誤って刪ったからである。敦字の下（説解）に「一曰誰何也」と云うのはその證とすることができる。李善は（晉 潘岳「藉田賦」注）「謂責問之也（厳しく問い白状させることを謂う（意味する）」の五字があるのを引く。蓋ん（王肅が）『孔子』家語に注したろう。『六韜』（金鼓篇）は「（凡三軍以戒爲固、以怠爲敗）令我壘上、誰何不絶（人執旌旗、外内相望、以號相命、勿令乏音）（全て三軍は戒めを以て堅固となり、怠れば惨敗するので）わが壘において、出入りする人誰も厳しく繰り返して尋問させ（兵の全員が、旌旗を手に執り、外と内で相いに望みあい、號令をばもって相いに命じあうようにさせて、音を乏しくさせるな）」、賈誼の書（『新書』「過秦論」）は「（良將勁弩、守要害之處、信臣精卒）陳厲兵而誰何（良れた武將と勁い弩とは要害の處を守り、信頼にたる臣と精鋭である卒とは鋭利な兵を陳べそして人を誰何する（厳し

く問いただす))」だ。…以上詰問の意

『史記』「卷四十六衛綰傳」の「歳餘、不誰何綰（一年余りして、綰に試しに尋ねた）」は、『漢書』では（「不誰何」を）「不孰何」に作る（顔師固注に「何即問也。不誰何者、猶言不借問耳」とある）。

韋注『國語（晉語）』は「驥弩注矢以誰何（驥と弩には矢を注^{つが}え、それで以て誰何（試しに尋ねてみる）する）」だ。（以上は誰何あるいは孰何の二字）

単独で誰と云うものもあり、たとえば『漢書』「五行志 下」の「大誰卒（主に見慣れぬ人を問う長官の下で働く役人）」、『易林』（大過之秦）の「無敢誰者（無敢えて誰^とう勇氣のある者はいない）」、楊雄「（衛尉・宮門の警備をする衛士の長官）箴（いましめ）」の「閭樂矯搜、戟者不誰（秦人の閭樂は矯りに搜し、（武器の）戟のようなものについては誰^とわらない）」、（文選）「耕田賦」の「靡誰督而常勤（靡誰督^とりて常勤兮、莫之課^とりて而自厲：誰も督^とまるものは靡^{いな}いが、しかし常に勤めよ、課^とられることなくとも自ら厲^つげめ、李善注：説文曰：誰、何也、謂責問之也。）」だ。…以上、疑問（詰問・試みに問う・不定）

単独で何と云うものがあり、例えば『廣雅』（釋詁）の「何、問也（何は問うである）」、「賈誼傳」の「大譴大何（大いに譴^とめ大いにす^とぐさま何う）」だ。

㊦示佳切（スイと発音）。十五部。

2 孰（孰）3下14b 孰

「㊦食べ物^{よくに}が^に銑^にている。㊦孰（手にもつ）と^{よくに}孰（よくに）るとに^{よくに}从^つう（つまり、よく煮たものを手に持つ）。㊦『易』に「孰」は^{よくに}銑^にである」という。

㊦^{よくに}銑^には、「大孰也（よく煮る）」だ。可食^{よくに}べるべき物が大いに孰^{よくに}えれば、則^{すなは}りそのときは^{よくに}孰^{よくに}で持ちそれを食べる。

㊦（5下29a）^{よくに}孰^{よくに}は「孰也（^{よくに}孰^{よくに}は孰^{よくに}である）」とあるから、此こは會意だ。各本（大小徐）は^{よくに}孰^{よくに}が^{よくに}從^つりて、非^{よくに}である（形声ではなく會意）。殊六切（シュクと発音）。三部（シュク スイ）孰と誰とは^{よくに}雙聲^{よくに}だから、故^{よくに}えに^{よくに}一説^{よくに}に「誰」というのである。後人はそういうことで乃^{よくに}り^{よくに}分別^{よくに}て^{よくに}孰^{よくに}字^{よくに}は^{よくに}生^{よくに}孰^{よくに}（生か煮^{よくに}えているかという場合の、^{よくに}孰^{よくに}）と爲^{よくに}し、孰^{よくに}は^{よくに}誰^{よくに}孰^{よくに}（疑問の意の場合の孰）と爲^{よくに}して^{よくに}しまった。

曹憲（『廣雅』「釋詁三」孰）は、「顧野王『玉篇』に始めて^{よくに}孰^{よくに}字^{よくに}がある（孰也。憲案説文解字^{よくに}從^{よくに}孰^{よくに}、即孰字也。與孰誰之孰無異、唯顧野王玉篇孰字加火未知所出（憲が案^{よくに}えるに『説文解字』では「從^{よくに}孰^{よくに}」なので即^{よくに}り孰字である。孰誰（ヒトを問うとき）の孰とは異^{よくに}らないが、唯^{よくに}だ顧野王『玉篇』では

孰字は火を加えたのみで未だ出所を知らない。』

『易』「孰𩚑」で、「鼎象傳曰。以木巽火、亨𩚑也」といい、許（慎）は（これを）據り所として「孰𩚑」に作る。

なお、説文には𩚑のみあり、5下7aで「𩚑字又作𩚑。𩚑同𩚑。」という。その根拠を『易』にあるとして最後で説く。

5下7a𩚑（𩚑）「㊦大孰也。㊦从倉壬聲。」

㊦特牲禮請期日羹𩚑注。𩚑、孰也。𩚑亦假稔爲之。釋言。饋餽稔也。字又作𩚑。𩚑同𩚑。（『儀禮』）「特牲禮」「請期日羹𩚑」では「𩚑、孰也（𩚑は孰である）」と注する。𩚑は亦た同時に稔（みのる）を假りてこれ（この字の意味）と爲る。（『爾雅』）「釋言」に「饋、餽、稔也（饋餽稔也）」という。字はさらに又た𩚑に作る。𩚑は𩚑に同じ。㊦如甚切。七部。

（𩚑）古文𩚑。从肉。

（𩚑）亦古文𩚑。心部𩚑下云。齋也。此古文系後人增羸。小徐說。李舟切韻不云亦古文𩚑。

23：本義の時の上声と餘義の時の平声は、声調の区別が意味の区別にあまり関係しないということか。

24：呵は説文にない。例えば、『漢書』「賈誼傳」の「大譴大呵（大いにせめ大いに問う）」で、顔師古は「何、問也」と注するように訶に通じる。

訶は3上28b「㊦大いに（きびしく）言って怒る。㊦言に从い可がその聲」とあり、㊦の段注で「虎何切（カと発音）。17部」と説く。

以上段氏説から、3字は同じ17部で、「問う」意に假りて用いられる。

25：『爾雅』では「釋詁」に「疇孰誰也」があり、疏に「釋曰皆謂語辭不為義也又猶言誰人也論語云君孰與不足陳風墓門云誰昔然矣注易曰疇離祉○釋曰否卦九四爻辭也」

参考文献

馮桂芬 説文解字段注攷正（台聯國風出版社・中文出版社聯合印行、民國63年）

十三經注疏 易經、尚書、詩經、禮經、左傳、爾雅

中華書局 二十四史（史記・漢書・晋呉）

頼惟勤 『説文入門』（1983）・『中国古典を読むために』（1996（ともに大修館書店）

中国古典文学大系（平凡社）『書経・易経（抄）』（赤塚忠）、『詩経・楚辞』（目加田誠）、

『春秋左傳』（竹内照夫）・『戦国策・国語（抄）・論衡（抄）』（常石茂他）

〔キーワード〕 『説文解字』、段注、六書説、語之助、表記言語